



## 行動自粛の夏季休業中に学んだこと

校長 豊島 登

「感染拡大に歯止めがかかりません…」というニュースキャスターのアナウンスが連日流れる夏となりました。危惧されていた変異株による感染爆発が起こり、子どもたちにも広まりかねない状況となっています。学校では可能な限りの感染防止対策に努め、安心・安全な環境を確保してまいります。一方で、子どもたちが毎日登校し、学びを継続することで、“生きる力”が育まれていくものです。今学期も、ギリギリの判断をしながらの学校運営となることが予想されますが、保護者、地域の皆様の一層のご理解ご協力をお願いいたします。

さて、2年続けて、行動の自粛を求められながらの夏休みとなりました。去年は2週間という短い期間でしたが、今年は例年通りのフルバージョンとなり、かえって時間を余ってしまったかもしれません。私にとっては、その分、東京オリンピックをたっぷりテレビ観戦することができました。開催にあたっては、様々な意見があり、多くの困難な出来事がありましたが、それらを何とか乗り越えて、世界のトップアスリートが力を発揮する姿を見させていただき、たくさん心を動かされました。そういう意味では、スポーツの力はやはりすごいなと感じます。

私が最も心を動かされたのは、今回から正式種目となった“スケートボード”です。BMX、3人制バスケットボール、スポーツクライミングなどとともに、アーバンスポーツ（都市型スポーツ）と呼ばれ、広いスタジアムや体育館などを必要とせず、街中や公園の小さなスペースでも手軽にできるのが特徴と言われます。しかし、私などは少し前に、深夜の道路っ端で大きな音をたてて騒いでいる、一見よからぬ若者たちの集まりを思い浮かべてしまいます。さらに、階段の手すりに乗って滑るなんて、普通では考えられないし、とんでもなく危ない行為です。既存の枠にはめられることを嫌う若者たちの対抗心が生んだスポーツとも言えるのではないかと思います。

ストリートという種目で見事金メダルを獲得した堀米雄斗選手は、難易度の高い技をさらりとやってのけてしまいます。ノーリー・バックサイド270・ノーズライド。格好良すぎです。しかも、そうした技をいくつも持っていて、熾烈な順位争いという相当なプレッシャーのかかる場面で、連続してできてしまう底力に驚きを感じました。また、一発逆転をかけて大技に挑戦して失敗した選手も、「こんなこともあるさ…」という感じで、堂々としていた姿にはさわやかな印象を受けました。さらに、解説の「すっげー」「やべえー」「半端ないっすね」といった、我々が使ったら叱られそうな言葉の連発にも新鮮さを感じました。

いろいろな意味で、学校や教育界が変わってきていますが、スケートボードを観戦して、既存の枠にとらわれていては新たな価値を生み出すことはできないのだということを学びました。

